

平成18年度病虫害発生予報第3号

平成18年5月11日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病	平年並	平年並
		縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	やや早い	少ない
		ニカメイガ	やや早い	少ない
		イネミズゾウムシ	やや早い	少ない
果樹	ナシ	黒斑病	平年並	平年並
		黒星病	平年並	多い
		クワコナカイガラムシ	やや遅い	やや多い
		ハダニ類	平年並	やや多い
	リンゴ	アブラムシ類	やや遅い	平年並
		斑点落葉病	平年並	平年並
果樹全般	ハダニ類	平年並	平年並	
野菜	スイカ	カメムシ類	やや早い	多い
		菌核病	平年並	やや多い
		つる枯病	平年並	平年並
	スイカ・メロン	うどんこ病	平年並	平年並
		アブラムシ類	やや遅い	やや少ない
シバ	ハダニ類	やや遅い	やや少ない	
		葉腐病(ラージパッチ)	平年並	平年並

[参考]

気象予報(抜粋)

1か月予報(5月6日~6月5日:5月5日、広島地方気象台発表)

向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

<可能性の大きな気温経過>

期	間	平均気温
5月6日	~ 5月12日	高い
5月13日	~ 5月19日	平年並か低い
5月20日	~ 6月2日	平年並

普通作物

[イネ]

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

（2）予報の根拠

- ア 昨年の穂いもちの発生は平年より少なく、種子の保菌率は低いと見込まれる。
- イ 気象予報によると、5月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想されており、苗いもちの発生にやや助長的である。また、6月の気温は平年並か高く、降水量は平年並、7月は気温、降水量ともに平年並と見込まれている。
- ウ 効果の高い育苗箱施用剤が普及している。

（3）防除上注意すべき事項

- ア 種子消毒を徹底するとともに、種もみが露出しないように覆土をていねいに行う。
- イ 苗におけるいもち病は急激に蔓延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除粉剤または液剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。
- ウ 育苗箱施薬を行う場合は、使用時期及び使用量を守って1箱ずつていねいに粒剤を散布する。
- エ 補植用苗が本田での発生源となることが多いので、補植後の残り苗は速やかに処分する。
- オ 山間部等のいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるので、ほ場の見回り等を行い早期発見に努める。
- カ 県内広域で、シタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤（ウィンアドマイヤー箱粒剤、デラウスプリンス粒剤10等）の耐性菌が発生しているため、当該薬剤の使用を控え、代替薬剤を使用する。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 やや早い
発生量 少ない

（2）予報の根拠

- ア 昨年の本病の発生量は少なかった。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、ヒメトビウンカの発育は平年よりやや早く推移するものと見込まれる。

（3）防除上注意すべき事項

県東部等の常発地では、ヒメトビウンカに対して効果の高い育苗箱施用剤を選択する。

3 ニカメイガ

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 やや早い
発生量 少ない

(2) 予報の根拠

- ア 5月9日現在、予察灯及びフェロモントラップへの誘殺は確認されていない。
- イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されており、ニカメイガの発育はやや早く推移するものと見込まれる。
- ウ 昨年の第2世代幼虫による被害は少なかったため、越冬量も少ないと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、局地的ではあるが発生が増加している地域がみられているので注意する。
常発地では、ニカメイガに対して効果の高い育苗箱施用剤を選択する。

4 イネミスゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや早い
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯への初飛来は5月1日(平年5月17日)に鳥取市で確認され、平年より早い誘殺であった。
- イ 5月7日現在、平坦部では既に越冬成虫の飛翔活動に必要な有効積算温度に達している。有効積算温度から推定される中平坦部の越冬成虫の最盛半旬は平年よりやや早い5月第5～6半旬頃になると予想される
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されている。
- エ 5月9日現在、県東部における4月下旬田植のほ場での食害程度は軽く(平均被害度1.6)、発生量は少ない。
- オ 前年の越冬世代成虫の誘殺数は平年と比較して少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗箱施薬の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずついねいに粒剤を散布する。
- イ 育苗箱施薬を行っていても本田での食害が急増する場合には、追加防除を行う。
- ウ 直播栽培などの育苗箱施薬ができない水田においては、成虫及び被害の発生量(成虫密度が0.5頭/株以上、又は被害葉が顕著に増加した場合)をみながら、本田初期に防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 発生予察ほ場における開花期以降の孢子飛散数は平年をやや下回った。
- イ 5月2日に行った県内15園の巡回調査による幼果のポリ袋検定による発病率は2.7%(平年4.7%)と平年を下回った。
- ウ 本年のナシ園における病芽及び枝病斑などの越冬菌密度は平年に比べて低い。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、気温の上昇とともに孢子飛散数の増加が予想されるため、出来るだけ早く小袋掛け作業を終了する。特に、降雨直後は孢子飛散数が増加するため、薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、小袋掛け直前にユニックス顆粒水和剤47の1,500倍液、有機銅フロアブル1,000倍とポリオキシソール水和剤1,500倍の混用液、ポリペリン水和剤1,500倍液など、小袋掛け終了後にはジアリン水和剤600倍液などを散布する。

ウ スピードスプレーによる防除地域では往復または縦横走行を行い、手散布地域では散布むらのないよう丁寧に薬剤散布を行う。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	多い

(2) 予報の根拠

病害虫発生予察注意報第1号(平成18年5月11日付)参照のこと。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第1号(平成18年5月11日付)参照のこと。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期	やや遅い
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県内のナシ園では、越冬密度が高いほ場が一部認められる。

イ 越冬卵のふ化開始は、平年より7日遅い5月7日(平年:4月30日)であった。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は高いか平年並と予想されており、越冬世代幼虫のふ化最盛日は、5月11日前後と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 昨年被害が多かった園や多発園では5~7日間隔で、次の時期に2回の防除を行う。

・幼虫ふ化最盛期	5月11日~15日
・幼虫ふ化終期	5月16日~20日

少発園では5月15日前後に1回防除を行う。

イ 薬剤はスプラサイド水和剤1,500倍液またはアプロード水和剤1,000倍液などを使用する。

ウ 越冬世代は、第1世代および第2世代よりふ化時期が揃いやすいので防除を徹底する。

エ 薬剤の散布にあたっては、クワコナカイガラムシが集合する枝葉の他、枝の切り口、粗皮下などにも十分かかるようにする。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア クワオオハダニの越冬卵のふ化初日は、平年並の4月18日(平年:4月20日)であった。

イ ハダニ類の越冬量がやや多かったことから、現地のナシ園では発生が多いほ場が認められる。

ウ 5月上旬現在、県予察ほ場におけるハダニ類寄生葉率は0%(平年:0%)で、平年並の発生となっている。

エ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

クワオオハダニの発生が多い園では、ダニトロンフロアブル1,500倍液などを散布する。また、カンザワハダニ、ナミハダニの発生が多い園では、コロマイト乳剤1,500倍液などを散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第2半旬の県予察ほ場におけるワタアブラムシの寄生新梢率は2.7%(平年:10.8%)で、発生時期はやや遅く、発生量はやや少ない。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生が多く認められるナシ園では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーの使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、年1回の使用とする。

[リンゴ]

1 斑点落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の本病の発生量はやや少なかったため、越冬菌密度はやや低いと見込まれる。

イ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の散布間隔は10日程度とし、かけむらのないように丁寧に散布する。

イ 薬剤は摘果期にマンゼブ水和剤(ペンコゼブ水和剤またはジマンダイセン水和剤)

600倍液など、袋掛け前にはアントラコール顆粒水和剤500倍液など、

袋掛け中にはジラム・チウラムフロアブル(ダイポルトまたはパルノックス)

500倍液などを散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における5月上旬のハダニ寄生葉率は0%（平年：0%）である。

イ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高いと予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニによる葉の寄生が認められた園では、ニッソラン水和剤2,000倍液などを散布する。

[果樹全般]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 多い

(2) 予報の根拠

病害虫発生予察注意報第2号（平成18年5月11日付）参照のこと。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫発生予察注意報第2号（平成18年5月11日付）参照のこと。

野 菜

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地ほ場における本病の発生量はやや多い。

イ 本病はやや低温（15～20）で、降雨が続くと発生が多くなる。気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想されており、今後も発病の増加が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 하우스やトンネル内が過湿にならないように換気を行う。咲き終わった花卉は早く摘み取って園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、スミブレンド水和剤2,000倍液、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ ハウスではスミレックスくん煙顆粒またはロブラールくん煙剤などを使用してもよい。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、現地ほ場における本病の発生はやや少ない。
- イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加するが、気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されており、平年並の発生が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 하우스やトンネル内が過湿にならないよう、換気を行う。
- イ 本病は、株元から発病するので、株元にも薬液が付着するように丁寧に薬剤散布を行う。
- ウ さらに、雨滴のあたる箇所からも発病するので、トンネル栽培のスイカの茎葉には雨がなるべくあたらないようにトンネル開閉を行う。
- エ 薬剤は、マンゼブ水和剤（ペンコゼブフロアブルまたはジマンダイセン水和剤）600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月上旬現在、現地ほ場における本病の発生はほとんど認められていない。
- イ 本病は、25 前後の気温と適度な湿度で発病が増加するが、気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。
- イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。
- ウ すでに発病のみられるほ場では、パンチョTF顆粒水和剤2,000倍液、トリフミン水和剤5,000倍液などを散布する。
- エ つる枯病も発生している場合には、ポリペリン水和剤1,000倍液などを散布する。

[スイカ、メロン]

1 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	やや遅い
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）における黄色水盤への有翅アブラムシ類の初飛来は平年に比べやや遅く、5月上旬までの飛来量はやや少ない。
- イ 5月上旬現在、ハウスおよびトンネル栽培スイカほ場におけるワタアブラムシの発生はほとんどみられていない。
- ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想されており、今後もやや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 発生初期の防除に努める。スイカのハウス栽培では、着果2週間後までに発生した場合は、DDVP乳剤50の1,000~2,000倍液、その後の果実肥大期にはアドマイヤー水和剤2,000倍液を散布する。トンネル栽培では、ツル引き誘引時期には、チェス水和剤3,000倍液、交配前にバリアード顆粒水和剤4,000倍液等を散布する。着果後はDDVP乳剤50の1,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液等を散布する。メロンではチェス水和剤2,000~3,000倍液、DDVP乳剤1,000~2,000倍液、モスピラン水溶剤8,000倍液等を散布する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、ハウスおよびトンネル栽培スイカほ場におけるハダニ類の発生はほとんどみられていない。

イ 4月の気温がやや低く推移したことから、ハダニ類の畦畔部からの移動時期もやや遅いと考えられる。

ウ 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いと予想されており、やや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア スイカ、メロンともに発生初期の防除に努める。バロックフロアブル2,000倍液、ニッソランV乳剤1,000倍液(スイカでは1,000~1,500倍で登録)等を散布し、やや多くなった場合はマイトコーネフロアブル1,000倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。

イ ミツバチ交配を行う前には、ニッソランV乳剤の使用は避ける(ミツバチへの影響日数7日)。

[シバ]

1 葉腐病(ラージパッチ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、生産芝での本病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が増加するが、気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されており、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

本病は、発病前の薬剤散布を基本とするが、すでに、パッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤500倍液0.5L/m²、バリダシン液剤5の500倍液0.5~1L/m²などを、スポット散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農薬検査所の「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.acis.go.jp/>)

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。

< 鳥取県病虫害防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害の発生予察情報、現地巡回調査結果やフェロモントラップ調査結果（ネキリムシ類、果樹カメムシ類）などの指導情報、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病虫害防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL：0857-53-1345、FAX：0857-53-5647

E-mail：byogaichu@pref.tottori.jp 又は kttr0301@sp.jppn.ne.jp

次回の予報発表は、6月8日（木）の予定です。